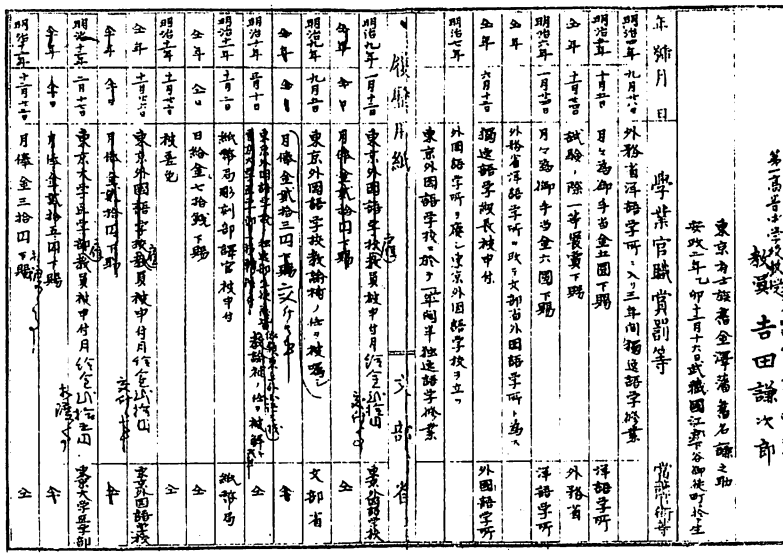
ドイツ語学者　吉田謙次郎

上村　直己

はじめに

明治のドイツ語教育史に関心のある人なら吉田謙次郎の名前をきっと記憶しているに違いない。なにしろ彼は旧東京外国語学校、東大医学部予科、東京大学予備門、第一高等中学校、第一高等学校及び独逸学協会学校附属の独逸語専修学校など当時エリート校で、しかも最もドイツ語教育が盛んだった学校の教師を歴任しているからである。彼の独語教師としての活動は明治九年から始まり、一高を退職後も独逸語専修学校においても講師として授業や夏期講習会等で教鞭を執るなど昭和初期まで続き、約五十年にも及ぶ。

だが、吉田に特徴的なことは著書・雑誌論文など残された業績が殆どないことである。筆者の知る限り彼は教科書一冊も編んでいないし、雑誌への寄稿も皆無に等しい。ひたすら教場や、講習会等でドイツ語を講じ続けた生涯であったと言える。通常こうした人物はまず考察の対象にならないし、一般の興味も惹かない。従ってこれまで吉田に関する研究は皆無である。吉田という独語学者は残された著書等がないので、その死と共に完全に忘れられたままになっているのも無理がない。だが、それでも語学教師の場合、著書のない人はそれがある人に必ずしも劣らない。本や論文を書くことよりもその分、教場で独語を教授することに全力を傾けていたとも考えられるからである。前述のように吉田は日本におけるドイツ語教育の初期に、そして日本人が真剣にドイツ語を学んだ時期に、しかも前記のようなエリート校に



第一高等中学校教授 吉田謙次郎

東京府士族 書生 澤藩 名謙之助
安政二年乙卯十二月十六日 武蔵国江戸谷御徒町於生

年	月	日	學業官職賞罰等		當職官衙等
明治一年	九月十七日		外務省洋語学所ニ入リ三年間独逸語学修業		洋語学所
明治二年	十月廿日		目ヒ為御手当金壱圓下賜		外務省
仝 年	十月十五日		試験ノ際一等賞賞下賜		洋語学所
明治三年	一月廿五日		月々為御手当金六圓下賜		
仝 年			外務省洋語学所ニ改ル文部省外国語学所ト為ス		
仝 年	六月十五日		獨逸語学教長被申付		外国語学所
明治七年			外国語学所ヲ廢シ東京外国語学校ヲ立ツ		
			東京外国語学校ニ於テ一年間半独逸語学修業		

履歴用紙 文部省

明治九年	一月十五日		東京外国語学校教員被申付月俸金弐拾五円下賜	東京外国語学校	
仝 年	仝 月		月俸金弐拾四円下賜		
明治十年	九月廿日		東京外国語学校教諭補ノ儀ニ付被嘱	文部省	
仝 年	仝 月		月俸金弐拾三円下賜ニ付ク	仝	
明治十一年	閏十月		東京外国語学校ヲ東京大学ニ合併シ教諭補ノ儀ニ付被嘱	仝	
明治十二年	十月一日		紙幣局勤務制部課官被申付	紙幣局	
仝 年	仝 月		日給金七拾銭下賜	仝	
明治十五年	十月十五日		被免	仝	
仝 年	十月廿五日		東京外国語学校教員被申付月俸金弐拾四円	東京外国語学校	
仝 年	仝 月		月俸金弐拾四円下賜	仝	
明治十七年	二月十五		東京大学理学部教員被申付月俸金弐拾五円	東京大学理学部	
仝 年	仝 月		月俸金貳拾五円下賜	仝	
明治十八年	十月十五		月俸金三拾四円下賜	仝	

吉田謙次郎履歴書（文部科学省蔵）

おいて長く独語を講義した人であった。従って彼の教え子には後年の優れた人材が多くいたと考えてよい。たとえ著書がなくともかかる人物に関する文献が一編ぐらいはあって当然ではなかろうか。そして、それを書くのは独逸学史を専攻する者の義務であろう。こうした思いから小稿をまとめることにした。

貢進生として初めてドイツ語を学ぶ

とは言え、筆者の手元にある研究資料は少ない。履歴書二通[1]と若干の周辺資料であるに過ぎない。吉田謙次郎は履歴書によると安政二年（一八五五）十二月十六日、当時の武蔵国江戸下谷御徒町において生まれた。父は旧金沢藩士の吉田淳一郎。幼名幸太郎、のち謙之助、または謙次郎と称した。履歴書には書いてないが、吉田謙次郎は明治三年には金沢藩貢進生として前田肇、桜井房次郎（のち房記）と共に大学南校へ入りドイツ語を学んだ。[2] 貢進生制度というのは各藩の推薦生を中央の大学南校に入学させ人材簡抜する制度である。小倉処平や平田東助の建議によるとされるが、太政官は明治三年七月、大学南校の充実のためその実施を布告した。即ち、

十六才から二十才までの若者を、藩の石高に応じて、十五万石以上三人、五万石以上二人、五万石以下一人ずつを割り当て五年間修行の予定であった。貢進生は入学に際し英語、仏語、独語から一つを選択しなければならなかった。明治四年正月二十二日改正「貢進舎生姓名簿」[3]によると、総数三百十人のうち英語履修者二百十九人と圧倒的に多く、仏語七十四人、独語はわずかに十七人であった。そうした中で吉田が独語を選んだのは、後年の独逸学の隆盛を考えれば、彼に先見の明があったと見るべきであろう。因みに、この時貢進生として独語を選んだ人には吉田のほかに安東清人（熊本藩）保志虎吉（三日市藩）、関澄蔵（福山藩）らがいた。大学南校では独語教師としてスイス人のヤーコプ・カデリー、ドイツ人のゴットフリート・フォン・ワグナー、V・ホルツであった。

だが大学南校は同年七月文部省が設立されると同時に大学の管轄を離れて文部省の所轄になった。そして大学東校と共に単に南校、東校と称することになった。だが次章に述べるように、吉田は明治四年九月には南校を退学し外務省洋語学所に入り三年間独逸学を学んでいる。従って吉田が大学南校、南校に学んだ時期は二年足らずであったこ

金澤藩	前田肇	金澤藩	吉田謙次郎
金澤藩	理櫻井房次郎（後房記）	鹿児島藩	園田孝吉
鹿児島藩	町田陽蔵	静岡藩	飯田需
静岡藩	木城直	静岡藩	小倉政吉
名古屋藩	永井久一郎	名古屋藩	小川善吉
名古屋藩	大澤良雄	熊本藩	○安藤清人
熊本藩	神足勝記	熊本藩	木下小吉郎（後廣文）

「貢進舎生姓名簿」（『東京帝国大学五十年史』上冊、152～165頁）より

とになる。当然ながら明治五年四月改正の『南校一覧』には彼の名はない。

外務省洋語学所時代

履歴書によると、吉田は明治四年九月「外務省洋語学所ニ入リ三年間独逸学修業」と記されている。外務省洋語学所は清語、露語、独語を教えた学校である。吉田はドイツ語を専修するためには南校より洋語学所の方が経済的に有利と考えたのであろう。ここでは独逸語学教授東條一郎[4]の指導を受けた。一年後には成績優秀のためか月々手当五円を下賜され、さらに外務省より「試験ノ際一等褒賞下賜」された。なお当時、吉田と同じく外務省洋語学所で独語を学んだ人に飯盛挺造[5]がいる。

さて吉田は明治六年一月からは月々の手当金は六円に増加している。つまり洋語学所時代は手当金を貰って勉強したということである。同六年には外務省洋語学所は文部省外国語学所と改称した。同年六月には謙次郎は独逸語学級長を申し付けられた。

東京外国語学校時代

明治七年外国語学所は廃せられ東京外国語学校が設立された（後年、旧東京外国語学校と称せられた。）それに伴い吉田謙次郎は新設の東京外国語学校において一年半ドイツ語を修業した。「東京外国語学校官員並生徒一覧[6]」（明治七年三月）によると、校長辻新次、独逸語学教諭心得に山内（天野）光屋、渡辺廉吉、ドイツ人教師にヴィトコウスキー、トーゼロウスキー、ハンゼン、クライネル、コニッケがいた。だが吉田が属した「独逸語学下等第一級」（この級には和田垣謙三、木場貞長、河本重二郎、猪子止戈之助らの名が見える。）はヴィトコウスキー、ハンゼンが受け持ってい

る。因みに、一級上の「独逸語学上等第六級」には江口襄、飯盛挺三がおり、一級下の「独逸語学下等第二級」には高木計、和田音吉郎らの名がある。

東京外語に約三年学んだ河本重二郎は「回顧録」[7]においてヴィトコウスキー、ハンゼンについて語っている。

又ハンゼンと云ふ人は此人は歴史と数学を担任して居たたが、其歴史の教へ方は実に面白いもので、全く史上の人物を其場に扮する如き調子であった。ビスマルク杯の云たこと杯を云て自分自ら当人である様に話したものであるから、余は大に歴史好きとなり今日迄地理と歴史は他人の知れるよりもより多く知ることになり、其好愛心より自然歴史ものは多く読む様になれり。

又ハンゼンは数学を教へたが、さて余は数学に甚だ無能で困難せり、殊に今でも記憶するが、按分比例ときては、一向に分らない為め点数甚だ劣点であった。依って一夏思ひ存分、数学を特別に学習した。それから按分比例も易く出来る様になれり、従て点数も大に上った。ハンゼンは飯田町通の山手側に住居し居たが、其時は未だ草茫々であった。ウヒトコスキと云ふ人は何処の人か知らぬ、偉大な体格で人相悪しき人物であったが、語学の受持であった。其人は甚だ怒り易き人で余は一度文章を書て行きいたく打たれたことがあった。（後略）

明治九年東京外国語学校教諭となる　―　独語教師へのスタート

そして吉田はここで成績優秀であったためか、明治九年（一八七六）一月十二日付けで東京外国語学校の雇教員を申し付けられた（給金二十円）。これが彼のドイツ語教育界へのスタートであった。八ヵ月後には東京外国語学校教諭補の任を委嘱された（月俸二十三円）。だが、履歴書によると明治十年三月、東京外語独逸部の生徒全員が東大医学部へ移転したので三月十日付で教諭補の任を解かれた。そして明治十一年十一月二日に紙幣局彫刻部訳官になった（日給七十銭）。これは彼のドイツ語の能力を活かした仕事だったことは確かだが、具体的には分からない。当時の日本の紙

幣はドイツの精巧な機械で印刷されていて（これは正式には明治通宝というが、一般にはゲルマン紙幣と呼ばれた）そのために急にドイツに対して紙幣の意匠か何かについてドイツ語で要望を伝える必要が発生したのではあるまいか。僅か二十日で訳官の仕事は免職になっているのもそれを想像させる。

その後同年十一月二十六日付で再び東京外語の雇教員になった（月俸二十円）。

東大医学部予科教師時代

吉田は明治十二年（一八七九）二月十七日付で東京大学医学部雇教員申し付けられた（トレード）（給金二十五円、のち三十円）。これは、東京大学医学部第六年報の「内外教員ノ事」欄に「二月十七日教員天野光屋東京外国語学校教員ニ転シ同校教員吉田謙次郎ヲ本部教員ニ傭フ」とあるので、東京外語と東大医学部間の交換人事であったことが分かる。

予科は五年で一等から五等まであった。四等と五等は甲、乙に分かれていた。予科では本科（同じく五年ですべてドイツ人教師が担当した）を修めるための基礎科目が置かれていたが、中でもドイツ語が最も重視された。文字通りドイツ語漬けと言ってよい。学生はドイツ語の勉強で明け暮れたであろう。従って学生の中には医者になるつもりはなく、ただドイツ語を学ぶために予科に入学した者も多かった。彼らは本科に進む前に多くは退学した。中途退学者が多かった点では東京外国語学校（旧）と同様であった。さて、吉田と雇用期間が重なる独語教員にはスドルフ・ランゲ、アドルフ・グロート、ゼレスニー、山村一蔵、川上正光、斎藤鉄太郎、生田堯則（たかのり）らがいた。一等から三等までは外国人教師が担当し、四等、五等は日本人教師が担当した。

次に参考までに『東京大学第一年報』[8]（起明治十三年九月止全十四年十二月）より「明治十四年夏学期医学本科予科生学科表」（時間割）の一部（七時ヨリ九時マテ）を紹介する。特に予科に注意されたい。

は號

明治十四年夏學期醫學本科豫科生學科表

時	等級／日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
七時	一等本科生	外科各論スクリバ	外科各論スクリバ		眼科學スクリバ	眼科學スクリバ	
	二等本科生	外科各論スクリバ	外科各論スクリバ		眼科學スクリバ	眼科學スクリバ	
	四等本科生	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル
	五等附科生	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス
	一等附科生	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン
	二等附科生	獨乙語學ランゲ	獨乙語學ランゲ	獨乙語學ランゲ	獨乙語學ランゲ	獨乙語學ラソゲ	獨乙語學ランゲ
	三等附科生	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート
八時	四等附科生甲	數學沢慎一					
	四等附科生乙	讀 法川上正光	文 法川上正光	作 文川上正光	歴 法川上正光	文 法川上正光	作 文川上正光
	五等附科生甲	譯 讀吉田碌次郎	分 數學沢慎一	分 數學沢慎一	分 數學沢慎一	分 數學沢慎一	分 數學沢慎一
	五等附科生乙	書 取生田堯朗	文 法吉田碌次郎	譯 讀吉田碌次郎	文 法吉田碌次郎	譯 讀吉田碌次郎	文 法吉田碌次郎
九時	四等附科生甲	會 話吉田碌次郎	讀 法川上正光	作 文川上正光	讀 法川上正光	文 法川上正光	作 文川上正光
	四等附科生乙	讀 法川上正光	文 法川上正光	地理學吉田碌次郎	地理學グロート	地理學グロート	地理學吉田碌次郎
	五等附科生甲	會 話吉田碌次郎	書 取吉田碌次郎	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一
	五等附科生乙	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一				

時	等級／日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
八時	一等本科生	內科外案臨床講義ベルフ	病理各論ベルフ	內科外案臨床講義ベルフ	病理各論ベルフ	內科外案臨床講義ベルフ	病理各論ベルフ
	二等本科生	病理各論ベルフ	病理各論ベルフ	內科外案臨床講義ベルフ	內科外案臨床講義ベルフ	內科外案臨床講義ベルフ	病理各論ベルフ
	三等本科生	外科總論スクリバ	外科總論スクリバ		外科總論スクリバ	外科總論スクリバ	
	四等本科生	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル	生理學チーゲル
	五等本科生	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス	解剖學デセス
	一等附科生	羅甸語學ランゲ	羅甸語學ランゲ	羅甸語學ランゲ	羅甸語學ランゲ	羅甸語學ランゲ	羅甸語學ランゲ
	二等附科生	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン	博物學ドゥデルライン
	三等附科生	獨乙語學グロート	獨乙語學グロート	地理學グロート	歴史ランゲ	歴史ランゲ	羅甸語學グロート
九時	四等附科生甲	獨乙語學セレスニー	獨乙語學セレスニー	獨乙語學セレスニー	地理學グロート	地理學グロート	算 術セレスニー
	四等附科生乙	讀 法川上正光	文 法川上正光	作 文川上正光	獨乙語學セレスニー	獨乙語學セレスニー	數 學沢慎一
	五等附科生甲	會 話吉田碌次郎	書 取吉田碌次郎	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一	譯 讀生田堯朗
	五等附科生乙	算 術皆沢慎一	算 術皆沢慎一				

この東大医学部予科で行った独語授業について吉田は二種の申報書を書いている。彼自身の手になる資料が少ないので、これは貴重である。その一つは『東京大学医学部第七年報』[9]（自明治十二年十二月至十三年十一月）に収められている。

逸語学教員吉田謙次郎申報

明治十二年十二月ヨリ全十三年十一月ニ至ルノ間四等予科五等予科ノ両級生徒ニ教授ス乃チ四等予科生ニ於テハ「ダニエル」小地理書ニ拠リ地理ヲ授ケ問答共ニ独逸語ヲ用ヰ対話ノ一助ト為ス五等予科生ニ於テハ「ヘステルス」第二読本ヲ以テ読法並ニ譯讀ヲ演習セシメ初期ハ「カドリー」文法書第二期ハ「シエーフエル」文法書ヲ用ヰテ独逸文法ヲ講シ傍ラ其例ヲ挙ケテ理会シ易クシ之ヲ暗記セシメ問答ハ和独両語ヲ以テシ時々諸歴史中ヨリ筆記ヲ為サシメ以テ書取法ヲ実演シ然ル後其文ヲ翻訳シ訳法ヲ学ハシム其他「ダニエル」小地理書ニ因リ地理ヲ教授スル　ハ四等予科生畧ト相同シ

獨逸語學教員吉田謙次郎申報

明治十二年十二月ヨリ全十三年十一月ニ至ルノ間四等預科五等預科ノ兩級生徒ニ教授ス仍チ四等預科生ニ於テハ「ダニエル」小地理書ニ據リ地理ヲ授ケ問答共ニ獨逸語ヲ用ヰ對話ノ一助ト爲ス五等預科生ニ於テハ「ヘステルス」第二讀本ヲ以テ讀法並ニ譯讀ヲ演習セシメ初期ハ「カドリー」文法書第二期ハ「シエーフエル」文法書ヲ用ヰテ獨逸文法ヲ講シ傍ラ其例ヲ擧ケテ理會シ易クシ之ヲ暗記セシメ問答ハ和獨兩語ヲ以テシ時々諸歴史中ヨリ筆記ヲ爲サシメ以テ書取法ヲ演習シ然ル後其文ヲ翻譯シ譯法ヲ學ハシム其他「ダニエル」小地理書ニ因リ地理ヲ教授スルヿハ四等預科生畧ト相同シ

五四十九

「独逸語学教員吉田謙次郎申報」

（東京大学医学部第七年報、自明治12年12月至13年11月）

吉田が使用した教科書は具体的には次のものを指すと考えられる。

「ダニエル」小地理 Danie (G.A.) : Leitfaden für den Unterricht in der Geographie

「ヘステルス」第二読本 Haesters (A) Lehr-und Lesebuch, Anschauungsunterricht für die Mittelklassen der Volksschule.

「シェーフェル」文法書 Schäfer (E.) : Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache.

「カドリー」文法書 Kaderly (J.) : : Lehrbuch der deutschen Sprache für die höhre Classen der kaiserlichjapanischen Akademie DAIGAKU NANKO.

当時の一般的な独文教科書が選ばれている。予科の下級生に対しては日本人教師が担当しているのは、吉田はドイツ語を用いたと書いているが、場合によっては日独両語を併用して教えることの必要からであろう。

もう一つの教科書は『東京大学第一年報』[19]（起明治十三年止同十四年十二月）に収められたものである。

独乙語学准助教授吉田謙二郎（ママ）申報

明治十三年十二月ヨリ十四年十一月ニ至ル一学年ニ於テ四等五等予科生ニ専ラ独乙学ヲ授ケ就中四等生ニハダニエルノ地理階梯ヲ以テ亜細亜、阿弗利加、欧羅巴、三大州地理概略ヲ教ヘ悉ク之ヲ暗記セシメ且ハウフノ小説集ヲ訳読セシメ其字儀文体及ヒ主意ヲ詳細ニ説明シ以テ読法ヲ演習セシム又独乙語ノ対話ニ熟練セシメンカ為ニ別ニ対話演習ノ時間ヲ定メ傍ラ類似ノ諸字ヲ集メ例ヲ挙テ其区別ヲ明ニス五等生ニ於テハシューフェルノ文法書ヲ以テ文字論ト文章論ノ一部トヲ教ヘ其闕ヲ補ヒ例ヲ挙ケ務テ了解シ易カラシメテ之ヲ実用スルカ為ニ和語ノ短文ヲ独乙語ニ訳サシメヘステルス読本ヲ訳読シ傍ラ歴史中ヨリ書取ヲ為シ之ヲ翻訳セシム又ダニエル地理階梯ヲ以テ地理ノ総論ヲ教ヘ別ニ対話文ヲ暗記セシメ対話ノ一助ト為ス授業ノ際ハ常ニ邦語ト独乙語ヲ兼用セリ

ダニエル地理階梯は前記の小地理書と同じ本を指すのではないかと思う。明治時代にハウフの小説は人々の好むドイ

ツ文学で翻訳も二十年前後に数種出ているが、既に明治十三、十四年頃に教科書にこれを取り上げたのは早い例で注目される。この五等生の授業では邦語と独語を兼用したのは、最下級生の語学力はまだ十分ではないことを考慮した結果であろう。

履歴書には書いてないが吉田は東大医学部予科以外に、私塾の訓蒙学舎でも教えていたようだ。東京都公文書館蔵の益海舎の牧緝一郎の履歴書に次のように見えるからである。(616-C8-4 願伺届録　明治20年)

「明治十二年二月訓蒙学舎ニ入リ教師佐久間某吉田謙次郎ニ就キ独逸学修業及ビ数学ヲ…」

さて履歴書によると吉田は明治十四年十月に至り、医学部准助教授に任ぜられた。次いで同十五年七月一日付で東京大学予備門の助教諭となり、予備門分學勤務を申し付けられた。そして同十七年七月には年俸金四百八十円を下賜されている。

東京大学予備門では独語教員に吉田のほかに教諭として川上正光、助教諭として生田堯則、中俣匡がいた。

だが、吉田は明治十八年一月三十一日には大蔵省三等属に任命され書記局報告課勤務となった。翌年三月には大蔵属に任命され、五月には判任官三等に叙せられたが、九月十八日付で依願免本官となった。かくして大蔵省時代は約一年半で終わった。大蔵省に勤めたのは、前述の紙幣局の場合と同様に彼の独語の知識を見込まれてのことであるのは間違いないであろう。具体的にどのような仕事に従事したのか明らかではない。

大蔵省を辞めて二日後に再び第一高等中学校教員を依嘱されている（一ヵ月金五十円）。そして二ヵ月後には第三部（医科）第一級の生徒長を依嘱された。

筆者の手元に『明治十九年十二月調　第一高等中学校生徒部伍役員録』という資料がある。巻頭に「第一高等中学校生徒部伍編成規則」というのが掲げられていて、その第一條に「生徒伍」を設けた理由を「生徒部伍ハ至誠順良信愛荘重ノ気質ヲ保持シ遵守整頓清潔ノ習慣ヲ鞏固ナラシムル等凡ソ学科外ノ要道ヲ完全ナラシムルノ便ヲ開カンカ為メニ相互ノ気脉貫通ヲ主トシ之ヲ設ク」としている。そして第二條で在舎と通学とを問わず生徒全員を四部に分け、第一部は

本科生生徒総員、第二部は予科生徒中英語学を以て入学した者、第三部は予科生徒中独逸語学を以て入学した者、第四部は仏語学を以て入学した者からそれぞれ成ると定めている。そして各部に部長と生徒長を置いているが、第三部の部長は寺田勇吉、第一級生徒長教員には吉田謙次郎、第三級生徒長教員には山田小太郎が任命されている。これによると第一高等中学校における地位は寺田が吉田、山口より上であったと見てよいであろう。

明治二十年（一八八七）十二月二十日第一高等中学校教諭になった。

一高教授時代

ここで『第一高等中学校一覧』及び『第一高等学校本部一覧』『第一高等学校一覧』等によって第一高等中学校及び第一高等学校（第一高等中学校は明治二十七年九月第一高等学校と改称）における吉田の肩書きの変遷を見ておこう。

『第一高等中学校一覧』　明治19-20　嘱託教員
同21-22　教諭
同23-24　教授
同24-25　教授
同25-26　教授
同26-27　教授
同28-29　教授

『第一高等学校本部一覧』
同29-30　教授
同30-31　教授　※独逸文学科主任
同31-32　教授　※独逸文学科主任

『第一高等学校一覧』

同32-33	教授	※独逸文学科主任
同33-34	教授	※第二語学科主任
同34-35	教授	※第二語学科主任
同35-36	嘱託講師及教員	
同36-37	嘱託講師及教員	
同37-38	嘱託講師及教員	
	同右	
大正7-8	講師及嘱託教員	
同8-9	講師及嘱託教員	
同9-10	講師	

当時の一高には錚々たる独語学者が揃っていたが、その中にあって五年間も独逸文学科や第二語学科（独語科）の主任を務めていることは、同科の重鎮として同僚たちの信望が高かったことを示している。

履歴書によると、吉田は明治三十五年（一九〇二）三月三十一日付で一高を「依願免本官」になっており理由は「病気職務堪ス」とある。これにより彼が一高を辞めたのは定年によるのではなく、病気のためであったことが分かる。だが一高辞職後も吉田は引き続き四月一日付で嘱託講師（非常勤講師）となり大正十年まで同校に留まった。なお履歴書によると、彼は明治二十九年には陸軍中央幼年学校生徒の教授を嘱託され、報酬として一ヵ月金三十五円を給せられ、同三十一年六月には勲六等瑞宝章を受けている。

独逸講文会

明治二十年代はドイツ文学への関心が青年たちを中心に高まった時期である。それをよく示すのが独逸講文会である。これは学習院、第一高等中学校（明治二十七年より第一高等学校と改称）独逸学協会学校、それに明治三十年代の初期には東京外国語学校のそれぞれのドイツ語教師による、独語・独文学の普及のための共同事業であった。聴講を希望する者は『講本』という独文のテキストを購入すれば参加できた。このテキストには詩、戯曲、散文の抜粋がびっしり詰まっている。現在、国立国会図書館に所蔵されている。一高の校友会雑誌第三十号（明治二十六年十月発行）の「雑報」欄に「〇独逸講文会」と題して次のような記事が出ている。

学習院及ひ本校、独逸学科教授諸氏の熱心によりて成れる同会は、大に独逸文学の青華を発揚し、吾か国、文運の奎張を輔翼し、数年来、専ら斯学の普及を企図し来り、本学年の如きは、一般独逸学生の来聴を許し、毎週金曜日午後三時半より、壱岐坂会堂に於て独逸文学諸大家名篇鉅作を講演し、悉く其妙蘊秘訣を発揮して遺すところならしめんとす。盛りなりと謂ふへし。而して本学年の発会には、大村講師、明快流暢の弁を以てビュルゲルの「レノール」を講せらる、其聴衆を聳動せし、固より怪しむに足らざるなり、爾来数周間、山口講師のギョーテ、「ヅアイグヌング」、保志講師のシルレル、「ディー、イデアーレ」、吉田講師の同「デル、カンプ、ミット、デム、ドラッヘン」の講義あり。会者常」に二百名に下らす、頗る盛会なり。余輩は此種も文学会の益健全なる発達を遂けんことを祈り止まさるなり。

ここに挙げられている講師とドイツ文学作品は、それぞれ大村仁太郎「Leonore」（G．A ビュルガー）山口小太郎「Zueignung」（ゲーテ）保志虎吉「Die Ideale」（シラー）吉田謙次郎「Der Kampf mit dem Drachen」（シラー）であるこ

とは言うまでもない。講本を見ると、当日の会は明治二十六年九月八日発行の第三号（3. Heft）によって講義したことが分かる。なお講文会の様子は自由キリスト教系雑誌『真理』や、『独逸語学雑誌』でもしばしば報じられた。

さて日本紳士録第一版（明治二十二年）では吉田については「第一高等中学校教諭、本郷区丸山新町十一」となっている。同第二版（明治二十四年）同第三版（明治四十三年）には記載なし。

明治三十年刊行の『日本現今人名辞典』には項目として吉田の名があり、次のように記している。

君は旧金沢藩士なり安政二年十二月十六日江戸に生る旧名謙之助後改む明治四年外務省洋語学所に入り独乙語学を修業し尋て東京外国語学校に転ず九年同校教諭補となり後紙幣局彫刻部訳官を命ぜられ東京大学御用掛となり同大学教諭に任ぜらる爾来大蔵省に出仕し十九年以来第一高等中学校教授の職に在り現今従六位勲六等にして尚ほ在職す（所二二円余、東京市本郷区駒込西片町一〇、ろ二二）

これは内容的には住所と所得税以外は履歴書を簡略化したものと言ってよい。

独逸語専修学校講師となる

一高教授を辞めた後、吉田は独逸学協会学校附属の独逸語専修学校の講師となった。該校は独逸語専修学校規則の第一條に、「本校ハ独逸語学ヲ専修セントスル篤志者ノ為メニ設置シタルモノニシテ其目的ノ何タルヲ問ハス広ク独逸語学ヲ教授スル所トス」とあるように、通常の学校と異なりドイツ語だけを学びたい者にとってはまことに好都合な学校で、夜間もあった。

高等科にては谷口秀太郎、高田善次郎、山口小太郎らと共に吉田も担当した。

明治三十八年十月号『独逸語学雑誌』には次のような広告が出ている。

第四回独逸文学科外講義

一、本講義は来る十月六日（金曜日）午後六時より開会、
聴講希望の者は速に本校事務所へ申し込まるべし

一、講義日時　毎週火曜、金曜の両日午後六時より毎回凡そ二時間つゝ

一、講師　吉田謙次郎君

一、講義回数　凡そ十二回にて結了

一、講義用書　Franz Grillparzer, Das goldene Vliess. Dritte Abteilung : Medea
本書は本校事務所にあり

一、講聴料　金壱円

明治三十八年十月

神田区西小川町一丁目

断片的情報になるが、明治四十四年一月九日開校の新学期の高等科で吉田はHebbel : Nibelungenを講議している。（独逸語学雑誌明治四十四年一月号）

そして同四十五年一月号『独逸語研究』（精華書院）巻末の独逸語専修学校の生徒募集広告では同年一月九日新学期開始の同校高等科の教科書を見ると次のように

Goethe, Egmont　谷口秀太郎　担任
Shakespeare, Der Kaufmann von Venedig　高田善次郎　担任
Strindberg, Der Vater　山口小太郎　担任
等　科

高　Andrejev, Novellen　吉田謙次郎　担任
Aufsatz u. Konversationen　安楽　直次（ママ）　担任

大正二年一月九日開講の独逸語専修学校の高等科では吉田はKleistのDer zerbrochene krugを講議した。因に、谷口小太郎はシェークスピアのユリアス・シーザー、高田善次郎は「ライプチッヒ大学生時代のゲーテ」、山口小太郎はハウプトマンの「沈鐘」をそれぞれ教科書に用いている。（大正二年一月号『独逸語学雑誌』）

大正二年四月一日からの新学期では吉田はAnzengruber : Der starke Pankranzを高等科の教科書に用いた。（大正二年四月号『独逸語学雑誌』）

因みに、明治四十五年に刊行された『現代人名辞典』（編輯兼発行人・古林亀治郎、中央通信社）には「吉田謙次郎君」の項目は見られるが、わずかに一行、

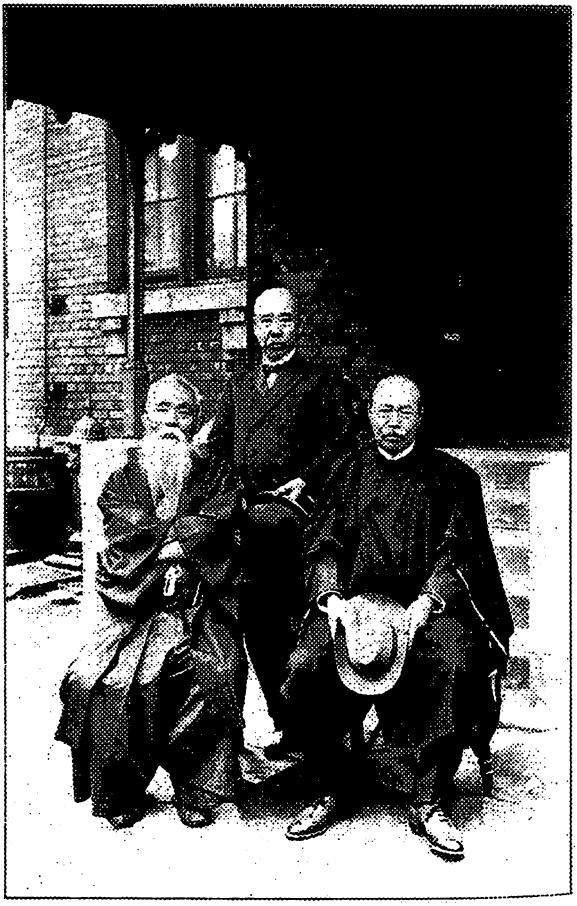
君は教育家たり（豊多摩郡代々幡村代々木二八五）

とあるだけである。同時代のドイツ語学者の山口小太郎や谷口秀太郎についてはかなり詳しい記述が見られるのと対照的である。これは吉田の経歴や業績には谷口や山口のそれに比して見るべきものが殆どないと一般に見なされていたことを示している。だが、その場合忘れてならないのは、吉田が二氏に較べて実力が劣るというのではなく、ひとえに著作がないことが影響しているということだ。

教壇上の吉田謙次郎

明治三十九年に一高に入学した和辻哲郎は「一高時代の思い出」[1]という文章で、英法組のドイツ語は吉田や、保志虎吉、山川幸雄など老体の、あまり活発でない教師が担当したが、独法組は活発な、あるいは厳しい教師たちが受け持っ

ていたこと、吉田より保志の方が評判がよかったことなどを証言している。幕末に生まれた吉田も保志も明治四十年頃は既に五十才を過ぎていて、大学出の文学士に較べたら年老いて不活発に見えたことは止むをえないであろう。年齢を別にしても、二人には当時の代表的ドイツ学者、例えば一高教授、文科大学講師、京大初代独文科教授を歴任した藤代禎輔の独文学者としてのある種の華やかさ、東京外語教授から一高教授になった大津康のドイツ語学者としてび天才的ひらめき、それに一高の名物教授であった丸山通一や岩元禎のような強烈な個性もなかった。だが、そうであっても二人の、特に明治九年から独語を講じ続けた吉田の功績は特筆すべきであろう。



一高勤続30年以上教授たち（大正9年）
右より保志虎吉（独語）吉田、監谷時敏（漢文）
（『向陵誌』、大正10年）

養老資金の寄付を受ける

学士会報三九五号（大正十年一月）に次のような「吉田謙次郎先生養老資金募集広告」が掲載されている。

拝啓時下愈々御清祥奉賀候偖て第一高等学校講師吉田謙次郎先生は東京大学医学部予科、大学予備門、第一高等中学校及第一高等学校に奉職して育英に従事せらるゝ事茲に四十年に及び候処今回老齢の為め其職を辞せらるゝ事と相成申候段我等一同深く遺憾とする所に有之候先生資性恬淡にして貨殖を念とせず加ふるに家庭の不幸事に遭遇せられ誠に御気の毒に在候につき此際親しく教を受けたる者及び親交ある者相計り醵金して先生養老の資に充て度存候間左の条項承知の上何卒奮って御賛成被成下度得貴意候　頓首

一、謝恩の方法。
　一、先生の肖像を第一高等学校に寄贈する事。
　二、醵金を特定条件の下に先生に贈呈する事。
二、醵金の措置。
　一切の処理を発起人に一任する事。
三、払込期間。
　大正十年三月末日迄。
四、醵金領収証。
　学士会の方には領収証を差出さず、学士会月報にて報告する事。
五、申込払込先。
　東京市駒込第一高等学校内菅虎雄宛（振替口座東京七二四四番）の事。

大正十年一月十五日

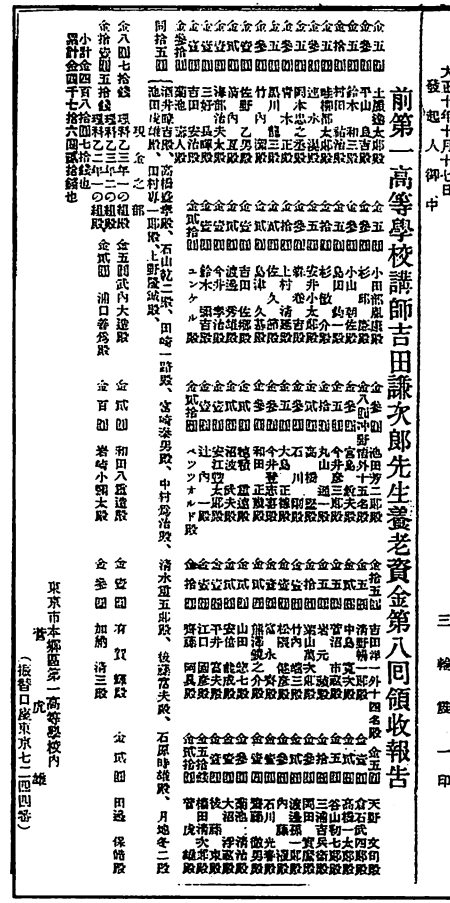
そして発起人として一七四人の名前が挙げられている。その中には次のような人たちが名を連ねていた。（○印は実行委員）

芥川龍之助(ママ)、入沢達吉、岩元禎、井上通泰、上田整次、○岡田和一郎、○大島正徳、狩野享吉、筧　克彦、河合栄次郎、○上村清延、菊池寿人、九鬼周造、畔柳郁太郎、久保猪之吉、呉　秀三、近藤次繁、○斎藤阿具、桜井政隆、沢井要一、○塩谷　温、○菅　虎雄、○杉　敏介、建部遯吾、谷口秀太郎、○土肥慶蔵、永井　潛、中村進午、芳賀矢一、波多野精一、鳩山一郎、葉山万次郎、平塚定二郎、○藤代禎輔、丸山通一、三並　良、三浦吉兵衛、村上直次郎、湯川寛吉、吉田静致

立派な顔ぶれと言ってよい。当時の教育界、学界を代表する人々が揃っている。実行委員にはドイツ語関係者が多い。芥川龍之介は菅虎雄との関係から発起人になったのであろう。この資料によると、「先生資性恬淡にして貨殖を念とせず加ふるに家庭の不幸事に遭遇せられ云々」がポイントである。吉田は本稿の冒頭でも述べたように教場でドイツ語を講じることに徹した人であって、論文やエッセイを書くことは勿論、翻訳を出したり教科書を編むこともなかった。それで一高講師を辞めてからは、独逸語専修学校の教師だけの収入では生活はかなり苦しかったであろうし、加えて家庭の不幸のために困窮の度が増したのは真実であろう。なお、家庭の不幸が具体的に何を指すかは不詳である。それを見るに見かねて関係者や教え子たちがこの挙に出たのであろう。

そして学士会月報三九六号（大正十年二月）に「前第一高等学校講師吉田先生養老資金第一回報告」というのが載っている。同月報には以後九回（四〇八号、大正十一年二月）まで大体毎号同様な報告が見られる。第二回からは「前第一高等学校講師吉田謙次郎先生…」と明記している。この資料には氏名と寄付した金額が記されている。寄付者は全部で八百九十人に達しており、その中には前記の発起人以外に次のような人たちがいた。

宇都野研、宮入慶之助、旭　憲吉、児島喜久雄、藤波　鑑、山崎正董、三島通良、斎藤茂吉、山岸光宣、長谷部言人、狩野直喜、大塚保治、美濃部達吉、立沢　剛、石倉小三郎、高野岩三郎、桑木厳翼、鵜沢総明、柳田国男、幸田成友、辻　高衡、弘田広毅(ママ)、青木昌吉、大町文衛、速水　滉、杉　敏介、ユンケル、穂積重遠、ペッツォルド、武内大造、安倍能成、内藤　濯、山口弘一、倉石武四郎、竹内瑞三、島津久基、田代義徳、立花政樹、石川貞吉、（順不同）



大正十年十月十七日
發起人御中

三輪錢一印

前第一高等學校講師吉田謙次郎先生養老資金第八回領收報告

金五圓　土屋逸太郎殿
金五拾錢　平田木山吉殿
金五拾錢　村田和治殿
金五拾錢　鈴木良治殿
金五拾錢　鈴木結殿
金五拾錢　阿部哲太郎殿
金五拾錢　柳瀬淑殿
金五拾錢　迎水正殿
金五拾錢　岡本忠之殿
金五拾錢　青川丞三殿
金五拾錢　竹内正殿
金五拾錢　風間義殿
金五拾錢　海野乙男殿
金五拾錢　清水亘殿
金五拾錢　佐藤太殿
金五拾錢　吉田安殿
金五拾錢　菊池治殿
金五拾錢　池田嘉殿
金五拾錢　酒井太郎殿
金五拾錢　酒井俊雄殿
同拾五錢　〔酒井俊雄殿、現金之部〕
金壹圓　高橋義一殿、石山乾二殿、田崎一郎殿、上野保誠殿、田村正殿
金壹圓　小田原清殿
金壹圓　杉山彦殿
金壹圓　小田切一殿
金壹圓　島田一郎殿
金壹圓　山崎一郎殿
金壹圓　朝倉三郎殿
金壹圓　鈴木清殿
金壹圓　佐藤一郎殿
金壹圓　今井太郎殿
金壹圓　島津久殿
金壹圓　吉田清殿
金壹圓　佐久間基殿
金壹圓　鈴木清治殿
金壹圓　渡邊秀雄殿
金壹圓　島田治郎殿
金壹圓　佐藤鄉殿
金壹圓　金子壹殿
金壹圓　金子壹殿
金壹圓　金子壹

るが、これは真実と受け取ってよいであろう。彼が教室でドイツ語を講議することに終始し、殆ど全く著作を残さなかったのはそれをよく示している。また彼が一高では昇進が遅れたこともそれと関係があろう。旧制高校は第一に教育機関であって研究機関ではなかったとしても著書や論文が全くなければ評価が困難であったろう。彼には元来昇進とか出世は眼中になかった。むしろそれを拒否した人ではなかったか。その点で彼は同時代の他のドイツ語学者とは大きく異なる。吉田は著作を残さなかったけれども、それは、ドイツ語学者としての実力が他のドイツ語学者に劣るということでは決してなかったことは経歴からみて明らかである。

吉田が亡くなった正確な時期は残念ながら不明である。ただ、日独書院発行の昭和二年九月号『独逸語学雑誌』（第二十九巻九号）の裏表紙に独逸語専修学校の新学期開始に際しての学生募集の広告が見られるが、そこに「本校講師吉田謙次郎」の記載がある。このあたりが独逸語専修学校やその夏期ドイツ語講座の講師として吉田の名前が『独逸語学雑誌』に見られる最後なので、この後まもなくして彼は世を去ったと推定される。

注

（1）一通は国立公文書館蔵「明治二十年官吏進退文部省三　二十三」所収の履歴書で、吉田が明治十九年に第一高等中学校の教員に採用された際に作成されたと推定されるもので、出生に始まり明治十九年十一月二日付で「第三部第一級生徒長ヲ被嘱」になるまでが記されている。他の一通は文部省（当時）蔵のもので、同じく出生から明治三十五年三月一高を依願退職するまでが記されている。

（2）唐沢富太郎『貢進生―幕末維新期のエリート』（ぎょうせい）一九七四年。三三三頁。

（3）『東京帝国大学五十年史』上冊、一五二～一六三頁。

（4）東條一郎（一八四八生）明治初期の独逸学者。会津藩士東條次業の長男として会津若松に生まれる。明治二

より独語を学び、同四年外務省洋語学所の独語教師兼外務省出仕であった。同六年オーストリアの日本大使館勤務を命じられ、九年帰朝本省勤務となる。同十五年再度墺国に駐在し、二十年帰国するや挙げられて通商局次長に就任、敏腕を振るった。二十四年官を辞して実業界に身を投じた。

(5) 飯盛挺造（一八五一～一九一六）旧佐賀藩士。物理学者。明治四年外務省洋語学所に入り、二年間独語を修めた。爾来東京外国語学校教員心得、東京医学校教授介補、東京大学医学部助教を経て、明治十四年七月東京帝国大学助教授に就任。同十七年自費でフライブルク大学に留学。哲学博士の学位を取得、同二十年帰朝。第四高等中学校教諭、のち教授となる。明治二十五年四月高等師範学校教授に就任。晩年は女子高等師範学校に勤務の傍ら、私立薬学校の教頭を務めた。明治十二年初版『物理学』は名著として知られた。

(6) 『東京外国語学校沿革』昭和七年、五八～七七頁。

(7) 「回顧録」は『中央眼科医報』二十四巻（昭和七年）から同二十七巻（昭和十年）まで十六回にわたり断続的に掲載された。

(8) 「史料叢書　東京大学全史　東京大学年報　第二巻」所収。二〇～二一頁。

(9) 『東京大学医学部第七年報』（自明治十二年十二月至十三年十一月）。「史料叢書　東京大学全史　東京大学年報第一巻」所収。三二八頁。

(10) 『東京大学第一年報』（起明治十三年九月止同十四年十二月）同八二頁。

(11) 岩波版『和辻哲郎全集』（第十八巻）所収、四二八～九頁。

［附記］本稿執筆に際し東京大学総合図書館及び同駒場図書館情報サービス係にお世話になった。記して謝意を表したい。